島嶼地域中高年者の生きがい感に関連する要因

— 社会関連性指標との関連について —

○小窪輝吉・田畑洋一（非会員）

（鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科）

キーワード：生きがい感、社会関連性指標、中高年者

Feeling that life is worth living (*Ikigai-kan*) of the middle aged persons who live on remote islands

Teruyoshi KOKUBO and Yoichi TABATA[#]

(Graduate School of Social Welfare, International University of Kagoshima)

Key Words: Feeling that life is worth living (*Ikigai-kan*), Index of social interaction, Middle aged persons

目 的

本研究の目的は、島嶼地域に居住する中高年者の生きがい感と日常生活における社会とのかかわりの状況（社会関連性指標）との関連を検討することである。小窪（2006）は、生きがい感スケール（近藤, 2007）を用いて、島嶼地域に居住する中高年者の生きがい感の構造と生きがい感に及ぼす要因の検討を行い、男性では「将来の生活不安」、女性では「趣味の数」が生きがい感に関連することを指摘した。一方、安梅（2000）は社会関連性指標を開発して、社会とのかかわりをもった生活スタイルが寿命や身体機能維持などの身体的健康と関連することを明らかにした。本研究では、社会関連性が精神的健康に及ぼす影響を明らかにするために、これから高齢期に入る中高年者を対象にしてどのような生活スタイルが生きがい感と関連するのか調べる。

方 法

調査対象者は、琉球弧の北と南に位置する2つの島嶼地域の20歳以上の一般成人であった。調査方法は郵送法で、調査時期は2012年11月であった。得られたデータのうち、55歳から64歳の中高年者で、生きがい感スケールと社会関連性指標のすべての項目に回答した105人（男性52人、女性53人）を分析の対象者とした。

分析で用いた変数は、性別、年齢、健康状態（1項目、4件法）、社会関連性指標（18項目、4件法）、生きがい感（16項目、3件法）であった。社会関連性指標は、安梅（2000）の採点法に準拠して得点化し、「生活の主体性」「社会への関心」「他者とのかわり」「身近な社会参加」「生活の安心感」の5つの領域ごとに合成得点を求めた。生きがい感は16項目の合成得点を求めた。

結 果

表1に、分析で用いた変数の性差を比較した結果を示す。

表1 性別による各得点の平均値(標準偏差)とt検定の結果

	男性 N=52	女性 N=53	t値
年齢	60.2 (2.971)	60.2 (2.686)	-0.62
生きがい感	22.98 (7.036)	27.57 (4.651)	-3.946** 男性<女性
健康状態	1.56 (.574)	1.55 (.539)	.097
(1)生活の主体性	3.73 (.843)	3.94 (.305)	-1.713+ (男性<女性)
(2)社会への関心	4.25 (.947)	4.34 (.960)	-.482
(3)他者とのかわり	2.85 (.415)	2.87 (.394)	-2.76
(4)社会参加	3.15 (.668)	3.28 (.632)	-1.018
(5)生活の安心感	1.73 (.598)	1.94 (.305)	-2.289* 男性<女性
社会関連性得点	15.71 (1.934)	16.38 (1.584)	-1.932+ (男性<女性)

注1) **: $p<0.01$, *: $p<0.05$, +: $p<0.1$

注2) 説明変数の(1)～(5)は社会関連性指標の領域を示す。

生きがい感の得点は、女性の方が男性よりも高かった($p<.01$)。社会関連性の総得点は、女性の方が男性よりも高い傾向が見られた($p<.10$)。その中で「生活の安心感」は女性の方が男性よりも高かった($p<.05$)。また、「生活の主体性」も女性の方が男性よりも高い傾向であった($p<.10$)。

表2に生きがい感との単相関と生きがい感を目的変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）の結果を示す。男性では、「生活の主体性」「社会への関心」「身近な社会参加」「健康状態」が生きがい感と関連していた。女性では、「生活の主体性」「社会への関心」「生活の安心感」が生きがい感と関連していた。

表2 生きがい感との単相関と生きがい感を目的変数とした重回帰分析の結果(ステップワイズ法)

	男性 N=52		女性 N=53	
	単相関係数 (r)	標準偏回帰係数 (β)	単相関係数 (r)	標準偏回帰係数 (β)
年齢	-.188 +		-.038	
健康状態	-.327 **	-.232 *	-.087	
(1)生活の主体性	.412 **	.376 **	.471 **	.449 **
(2)社会への関心	.401 **	.324 **	.296 *	.283 *
(3)他者とのかわり	.133		.146	
(4)身近な社会参加	.389 **	.254 *	.180 +	
(5)生活の安心感	.330 **		.267 *	.236 *
調整済みのR ²		.414		.318
F値		9.995 **		9.073 **

注1) **: $p<0.01$, *: $p<0.05$, +: $p<0.1$

注2) 説明変数の(1)～(5)は社会関連性指標の領域を示す。

考 察

島嶼地域に居住する中高年者の生きがい感は、男性よりも女性の方が高かった。女性の社会関連性得点が男性よりも高い傾向にあることから、積極的に社会とのかかわりを持ちながら生活することは生きがい感を高めることにつながると思われる。その点、中高年者の生活において社会的なつながりが重要であることを示唆している。

生きがい感と関連する要因のうち、男女共通していたのは「生活の主体性」と「社会への関心」であった。積極的な生き方をして社会の出来事に関心を持った生活をすることが中高年者の生きがい感にとって重要であることを示している。性別でみると、男性にとっては地域社会とのかかわり作りが重要でありそのためには健康であることが求められ、女性にとっては緊密な人間関係が重要であるといえよう。

引用文献

安梅勲江 2000 エイジングのケア科学 川島書店

小窪輝吉 2006 離島に居住する中高年者の生きがい感につ

いて 日本心理学会第70回大会発表論文集

近藤勉 2007 生きがいを測る ナカニシヤ出版

注) 本研究は、2012年度科学研究費補助金基盤研究(B)「琉球弧における地域文化の再考と地域再生プランおよび実践モデル化に関する研究(研究代表：鹿児島国際大学大学院教授田畑洋一)のデータの一部をまとめたものである。